

平成 29 年度事業計画

(自 平成 29 年 2 月 1 日～至 平成 30 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

I はじめに

日本薬学会は約 18,000 名の会員を擁し、1880 年の創設以来 140 年弱の伝統を有する薬学における中核的学術団体です。薬学のアイデンティティーは「くすり」であり、新薬開発、医薬品の創製、製造、安全性と有効性、供給、適正使用、生体での作用機序など広範に及びます。またそのベースとなる生命科学、有機化学、医療薬学や、より広範な医療機器、再生医療、予防医学を含めた種々の物質を基盤とする健康や医療全般にかかわる事象が当てはまると考えられます。

超高齢社会の中で、自立した日常生活を送りながら長寿を迎える健康長寿は「くすり」により成り立つ部分が大いと考えています。また少子化のために数十年後には世界人口の 1%を割ると言われている我が国の人口や、有する資源を考えると、付加価値の高い「くすり」や健康・医療関連産業は、重要な意味を持つと考えられます。そのためにも基盤となる日本薬学会が発展していくことは重要な要素と考えています。平成 29 年度の実業計画としては、これまでの重要な事業を踏襲しつつ、如何に発展させるかを考えるものとなると思います。以下に平成 29 年度の実業計画と取組みについて述べたいと思います。

学会誌の発行は学会の重要な仕事であり、逆に学会の活性は学会誌に現れると考えています。日本薬学会が刊行している学術誌は *Chem. Pharm. Bull.*, *Biol. Pharm. Bull.* 薬学雑誌の 3 誌ですが、学術誌の活性化は重要な課題と認識しております。時代のニーズに合った情報を、ニーズに合った方法で発信することを念頭に置いて、知恵を絞り、学術誌等のさらなる充実・発展を目指していきたいと考えています。また英文 2 誌に関しましては、科学技術振興機構 (JST) の協力を得て、J-stage を利用した閲覧の利便性向上に取り組んでいます。ファルマシアは委員の皆様のおかげで、毎号充実した内容となっています。これは今後も続けていきたいと考えています。

次に本学会を担う次世代若手研究者の支援に関する取組みについて述べます。今後の我が国における薬学の発展に欠かせない次世代若手研究者の支援に関しましては、大学院博士課程・博士後期課程を対象とする「長井記念薬学研究奨励事業」が順調に機能しています。特に薬学生および大学院学生が、大学における研究の成果発表の場として日本薬学会年会を考えて頂き、毎年末に多くの学生会員が登録して頂くことは、有難いことと考えております。できれば、薬学部籍を置く早い時期から学生会員になりたくなるような仕掛けが考えられないかと思っております。薬学教育・薬剤師教育は日本薬学会の中でも重要な位置を占めると考えています。今後の教育や生涯教育に対して日本薬学会がどのような貢献を成しうるかを考えていきたいと思っております。

日本薬学会には各領域の専門性に基づく部会、および地域に基づく支部があります。部会、支部の活動は日本薬学会の原動力であり、部会、支部および年会における顕彰活動、優秀発表賞や奨励賞は、若手研究者の薬学研究への意欲を高め、同時に日本薬学会への帰属意識を高めるために有効に働いていると考えています。特に各部会では、部会に所属していない若手研究者を積極的に所属して頂くような仕掛けをつくることができればよいと考えています。

日本薬学会は、高校生を始めとする若年層を対象に薬学への招待を行ってきました。高校

生以下の年代では、多くの若者が薬学=薬剤師という意識を持っていると思います。これは大切なことではありますが、一方で薬学研究に関して、早くから接する機会を持てるようにし、興味と魅力を示すことは重要と考えます。現在、日本薬学会では卓越研究成果公開事業を通して、ネット上で薬学における研究に関する情報を公開する準備を進めています。これら、日本薬学会あるいは薬学を知ってもらう広報活動には、今後とも力を入れていきたいと考えています。

学会の国際化は薬学領域に限らず重要な課題ですが、特に薬は世界レベルで開発販売されていることを考えると、ますます重要度は上がると考えています。FIP（国際薬学連合）やAFMC（アジア医薬化学連合）、およびドイツ、アメリカ、韓国の薬学会との交流をはじめ、国際創薬シンポジウムの充実を図っていききたいと考えています。また、学会の国際化推進のなかで、現状では、海外の方が会員になるメリットがあまり見えてきません。海外の方も会員になりたくするようなメリットと仕組みを考えることも重要であると認識しています。日本薬学会の発展のために、学会員の皆様のご協力とご支援を賜れば幸いと存じます。

II 事業計画事項

1 平成 29 年度代議員総会の開催

平成 29 年 3 月 24 日（金）に仙台国際センターにおいて開催します。

なお、代議員総会は代議員をもって構成する総会ですが、本会会員であれば総会に出席して意見を述べることができます。

2 学術研究・教育活動の推進

1) 学術誌の発行

質の高い研究成果の投稿を促進しながら、出版までの作業を迅速、正確かつ効率的に行い、薬学ならびに関連諸科学の発展に寄与してまいります。各誌の特性、Scope を最大限に活かし、学術論文発表の場の提供と学会賞受賞記念総説の掲載など、誌面の充実を目指します。高度情報化社会の趨勢を視野に、効果的な情報発信を行ってまいります。

本年度の学術誌の発行予定は次のとおりです。

- ・ YAKUGAKU ZASSHI（第 137 巻）年 12 回
- ・ Chemical and Pharmaceutical Bulletin（第 65 巻）年 12 回
- ・ Biological and Pharmaceutical Bulletin（第 40 巻）年 12 回

2) J-STAGE との連携

国際発信力強化の一環として J-STAGE と連携し新たな取り組みへの参画、モデルケースとして公開している英文誌の画面インターフェースの開発を促進いたします。

3) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援（別紙 1）

(1) 年会の開催

年会はひとつの学術大会の枠にとどまるのみでなく、日本の科学研究に貢献する重要な事業であり、本会の目的である薬学の進歩・普及ひいては学術文化発展の実現を支援しています。特に薬学を学ぶ学生にとっては学会との最初の接点となる場であり、また、薬剤師職能団体や製薬企業関係者との相互連携およびドイ

ツ、アメリカ、韓国各薬学会などの国際機関との交流促進の場となっております。

(2) 国際創薬シンポジウムの開催

創薬に関わるアカデミア、特に企業の研究者の興味を引くシンポジウムとして第135年会（神戸）から引き続き国際創薬シンポジウムを開催します。このシンポジウムは、将来的には薬学会年会が世界の創薬研究者の情報交換の場として機能することを目指します。特に、創薬と育薬（臨床現場の薬剤師）の研究者集団として発展してきた日本薬学会の独自性を世界にアピールする場とします。

(3) 部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者・薬学生など次世代を担う優れた人材の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会ならびに顕彰活動などを通じ、各部会の特長に合わせて特色ある活動を進めてまいります。部会活動の円滑化をはかるため、部会長会議を開催し、連絡調整・情報交換を行います。本年度の各部会の活動は（別紙2）のとおりです。

(4) 支部の活動

支部は、会員と日本薬学会との接点の場です。地域薬剤師会との交流、最新薬学講習会、卒後研修会、高校への薬学ガイダンスなど地域に密着した積極的な事業展開を行い、特に6年制の学生の支部大会への参加を積極的に奨励し顕彰するなど、学生会員の確保に繋がるよう努力してまいります。支部長会議では、理事会の動向を把握し、ともに連携しながら活性化を推進してまいります。本年度の各支部の活動は（別紙3）のとおりです。

(5) 創薬セミナーの開催

創薬セミナーは日本薬学会の看板セミナーです。「創薬」を中心テーマとする本セミナーでは、産官学の第一線で活躍する講師の講演を聞き、忌憚りの無い意見を交換します。また、参加者全員が同じホテルに泊まり、文字通り寝食を共にしながら創薬の夢を熱く語り合う場となっております。本年度もこの基本方針を踏襲します。

また、本セミナーの参加者の大多数は若い企業研究者です。日本薬学会が核となり30年にわたって創薬研究者育成に取り組んできた本セミナーの使命は十分に果たされています。

なお、平成29年度は、日本を支える基幹産業としての製薬業界の今後を展望し、創薬研究の新しい展開を追求できるような企画を行うとともに、全員参加型セミナーとして、社長講演、産官学からの講演、ミキサー、談話会、自由討論会などの企画をより充実させ、進化したセミナーとなるように計画します。

4) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

(1) 研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者を輩出することを使命として、学位を取得するための研究に専念できる環境を整備する

べく長井記念薬学研究奨励支援事業を行ってまいります。平成 29 年度も同様に募集を行い、支援事業の趣旨に沿って選考を行ってまいります。

(2) 授賞

日本薬学会の学術研究評価および活性化事業として、会員の卓越した業績に対し、下記の賞について受賞候補者の推薦募集を行います。選考手続きを進めるにあたっては、それぞれの賞の趣旨に沿って選考を行ってまいります。

- | | |
|-----------|------------------|
| ① 薬学会賞 | 4 件以内 |
| ② 学術貢献賞 | 6 件以内 (1 件/1 部門) |
| ③ 学術振興賞 | 6 件以内 (1 件/1 部門) |
| ④ 奨励賞 | 8 件以内 |
| ⑤ 創薬科学賞 | 2 件以内 |
| ⑥ 教育賞 | 2 件以内 |
| ⑦ 功労賞 | 1 件以内 |
| ⑧ 佐藤記念国内賞 | 1 件以内 |

(3) 他機関関係賞などへの推薦

各種財団・機関が募集する関係賞や研究助成などの本会への推薦依頼に対し、本会会員より候補者を積極的に推薦します。

さらに、国（省庁）による表彰についても候補者の推薦依頼に応じて推薦します。

5) 薬学教育基盤の整備

日本薬学会にとって「薬学教育」は学会全体として取り組んでいる重要事業です。どの分野に進んでも、今後の科学技術の進歩に対応できる基本的な資質と能力の涵養を図るとともに、国民の期待に応えうる医療人として、生涯にわたって研鑽を続け、社会に貢献していく人材を輩出することを使命としています。日本薬学会は、薬学教育の改善・充実のために、他の薬学関連団体と協力して薬学教育に関する課題の発見・解決に取り組むとともに会員の教育能力の開発および向上を支援する機会を抵抗してまいりました。

学生、若手教員等を対象としたワークショップの企画・開催、また、4 年制薬学教育が直面している諸問題を日本学術会議薬学委員会と連携して検討します。学会の観点から医療人の資質を確保するための方策を支援します。

また、生涯研鑽支援の見地から、健康サポート薬局に申請する機関の研修プログラムの確認作業を行い、社会貢献を果たします。

さらに、文部科学省委託事業の選定により、海外の薬学教育との比較調査と改訂版モデル・コアカリキュラムの英訳ならびに大学院 4 年制博士課程の現状把握及び分析を行い、課題と対応策について提言いたします。

3 学会情報の配信

薬学の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業などの最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、健康福祉社会の発展に寄与してまいります。会員に対しては、会員のニーズを的確に把握してその満足度の向上をはか

り、非会員の薬学関係者に対しては本会活動の意義を理解することで入会を促し、一般（広範な非会員）に対しては、薬学と医薬品に対する関心と理解を深め、本会活動への賛同・支援の獲得に努めていきます。

(1) 社会への発信

日本薬学会では平成 28 年度から男女共同参画推進の取組みを開始しました。本会は、新しい未来を創造しながら、生命現象の解明と医薬品の適正使用をめざし、人類の健康と福祉のために着実な発展を続けています。男女共同参画を推進することで、性別年齢を問わず、すべての人が対等な立場で個性と能力を十分に発揮し、自らの希望に沿った形で活躍できる男女共同参画社会の実現に寄与します。本年度は仙台年会にて理事会企画シンポジウムを開催し、会員とともに男女共同参画の現状を共有し、今後の取組みについて検討いたします。

(2) 会誌の発行

薬学は、創薬・生命科学の基礎研究から創薬開発、薬の臨床応用、薬剤師教育まで幅広い領域をカバーし、また日本薬学会は大学等のアカデミアに属する教員、学生から薬剤師、企業人まで広範な会員で構成されています。ファルマシアは会員誌として、会員に広汎な情報を提供するのみならず、学会の広報として内外の情報を分かりやすく、また親しみやすく提供することも目的としています。

また、新規会員の増加につながるよう、創薬に関わる若い研究者、ベンチャーを含む企業、学部学生・大学院生などが興味を持つ読物をさらに充実させて魅力ある雑誌をめざすとともに、広報委員会との連携を図りながら、医療薬学系読者向け分野のテーマの充実を図り、医療系の基礎薬学としての情報発信を図ります。

なお、本学会会員には、購読者番号とパスワードの入力により、本誌発行日に J-stage 掲載の WEB 版を閲覧可能としております。また、発行後 1 年経過した掲載分を全文公開することにより、ファルマシアを広く周知出来るよう情報発信に取り組んでまいります。

(3) ホームページの更新

薬学会の学術活動や事業について迅速な広報を行います。会員の活動に資する最新情報の提供を行い、その満足度を高めるページの作成に努めます。特に、今後の学会活動を支える学生会員の確保に向けて、中高生（非会員）に対して、薬学や医薬品についてわかりやすい情報を提供して薬学の面白さの啓発に努め、魅力的な薬学会を提示するためのコンテンツを提供します。

(4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」は年間 8 報を目処として、会員へ日本薬学会の理事会方針を速やかに伝達し、情報の共有化を行います。

(5) 報道機関対応

メディア（報道機関）に対しては、薬学に関連する最新情報の提供と意見交換の場を設けて、報道機関を通して社会へ向けて開かれた窓口の構築に努めます。

(6) 刊行

DVD「ナガイ博士の薬学への招待」を始めとする薬学普及啓発誌（薬学への招待シリーズ）の普及に努めます。また、マスコットキャラクター（ナガイ博士とドリン君）を活用しながら、社会へ向けてYouTubeに専用チャンネル「日本薬学会公式チャンネル」を開設し、広く薬学会の活動を周知いたします。

4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献します。

(1) 共同主催、共催、後援、協賛

日本学術会議における薬学研究者の活動を支援するため、シンポジウムを共同で主催します。また、本会と密接な関係を持つ団体が主催する関連学術集会（国内、国際）の共催、後援、協賛を行います。

(2) グローバル化の推進

①国際薬学連合（FIP）への対応

FIPに加盟する国内4団体の一つとして日本FIP連絡会議（年2回）に参加・協力をしています。第137年会（仙台）ではFIPフォーラムを企画し、FIP本部および韓国から講演者を招待します。また、FIP第77回年会（韓国、ソウル）をはじめとするFIP事業への支援を行います。

②代表者および講師の派遣・招聘

・ドイツ薬学会

ドイツ薬学会年会2017年（平成29年秋）に会頭および次年度年会組織委員長2名を派遣する予定です。また、3月にシンポジウム「Frontier in Medicinal Chemistry」へ講演者2名を派遣する予定です。

・アメリカ薬学会、韓国薬学会

ともに日本薬学会第137年会（仙台）において合同シンポジウムを開催する予定です。

5 学会基盤の整備・確立

1) 会員関連

(1) 会員増強への取り組み

日本薬学会は、社会的要請に応え薬剤師養成の任を果たすとともに、日本のアカデミアおよび創薬研究において、有機化学、生物学、分析・物理化学の観点から大きな貢献を果たしてきました。

特に、研究集会開催などによる学術研究への寄与、国際化や薬学教育改善への取り組み、薬学生への支援事業など活動は多岐に渡っています。

次世代の更なる発展へ向けて、これらを一層充実するためにも、学会活動の基盤となる会員増強を目指し、関係部署と連携を図り、積極的な対策を検討します。

また、機関会員である賛助会員に向けて、さらに魅力ある学会となるよう既存

の優遇制度の見直しを諮ります。

加えて、薬学紹介用リーフレットを配付し、薬学会を広く周知するための努力を重ねます。

(2) 名誉会員、有功会員ならびに永年会員の推薦

定款第5条に基づいて、代議員総会において名誉会員を決定し、理事会において有功会員および永年会員を決定します。

2) 長井記念館の維持管理

長井記念館は竣工から25年が経過し、修繕費の増加が見込まれます。修繕計画については、本館の管理代理者である三菱UFJ信託銀行とともに本会が主体的に検討し、会館の改修・諸設備の保守営繕を怠りなく策定・実行します。本年は、懸案の大規模修繕である空調改修工事に着手しますが、改修コストの圧縮を図りながら、入居テナントへの配慮を怠りなく進めます。

また、本会が所有する固定資産は、長井記念館など一定以上の規模であるため、固定資産管理システムを導入し、減価償却を容易にするなど、事務の正確化、透明化に努めます。

3) 賃貸収入と会館の運営

本会では会館の賃貸事業収益をもって、学会運営の財務基盤を補完していることから、三菱UFJ信託銀行と連繋を密にし、常に状況把握を正確に行って運営基盤の安定化に資するよう努力しております。良質なテナントの確保に努めることにより、適正な収入を受理できるよう努めます。また、会館の各施設および設備の向上を積極的に計ることで価値を高めるようにいたします。